



大学院リサイタルシリーズ⑥

千秋楽 ~フルートの対話~

千秋楽 ~フルートの対話~



2021年10月30日(土) 11:00 開演 (10:40 開場)

洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン 1F

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

-Program-

1. 村松紀親(フルート)

井上友美(ピアノ)

G.エネスコ / カンタービレとプレスト

G.Enesco(1881-1955) // Cantabile et Presto

尾高尚忠(1911-1951) / フルート協奏曲 OP.30b

2. 吉村由望(フルート)

井上友美(ピアノ)

F.プーランク / オーボエとピアノのためのソナタ FP.185

F.Poulenc(1899-1963) // Sonata for Oboe and Piano FP.185

F.プーランク / フルートとピアノのためのソナタ

F.Poulenc(1899-1963) // Sonata for Flute and Piano

3. 山崎春奈(フルート)

井上友美(ピアノ)

J.イベルル / フルート協奏曲

J.Ibert (1890-1962) // CONCERTO

-Program Note-

G.エネスコ / カンタービレとプレスト

ジョルジュ・エネスコ(1881-1955)はルーマニアの作曲家、ヴァイオリニスト、ピアニスト、指揮者である。幼年期より才能が発揮し才能が認められ7歳でウィーン音楽院に進学し作曲を学ぶ。1859年にパリ音楽院に入学しヴァイオリンを学び、1920年半ばからヴァイオリン教師としても著名になる。1923年にニューヨークにおいて、フィンランディア管弦楽団の演奏会で指揮者デビューする。

『カンタービレとプレスト』は1904年にパリ国立高等音楽院フルート科の卒業試験のために作曲された。前半の「カンタービレ」の部分では、ヴァイオリンを思わせる伸びやかな旋律が細かいパッセージとともに現れ、ゆっくりと優しい表情豊かなメロディがつづられている。後半の「プレスト」の部分では、前半とは一転して華やかな技巧を披露する派手な曲となっている。試験用の曲のため7分と短い曲だが、彼の音楽性の詰まった楽曲となっている。

尾高尚忠 / フルート協奏曲 OP.30b

尾高尚忠(1911-1951)は日本の作曲家、指揮者である。幼いころから音楽に親しみがあり、1931年にウィーンへ留学。翌年に一時帰国し、その間に「日本組曲」でワインガルトナー賞を受賞。1938年に同校のアウスゲツァイヒネット（卓越賞）を以って卒業し、指揮者として活躍する。1940年に帰国後、作曲家及び日本交響楽団（現在のNHK交響楽団）常任指揮者として活躍、国立音楽大学作曲科教授に就任。

『フルート協奏曲』は、当時フルート奏者だった森正(1921-1987)の依頼を受けて作曲、1948年に小編成オーケストラ版（作品30a）を森正の独奏、作曲者の指揮により初演された。1950年終わり頃に大編成オーケストラ版へ改訂するが指揮活動や酷い頭痛に悩まされ、思うように作業がはかどらずに最終ページの数小節を残して1951年2月16日に他界した。その後弟子の林光により補筆完成され、1951年3月5日に大編成オーケストラ版(作品30b)を「尾高尚忠追悼演奏会」にて吉田雅夫の独奏、山田和男の指揮、日本交響楽団により初演された。

第1楽章 *allegro con spirito*

日本の代表的な音階である「五音階（ペントニック・スケール）」を多く用いられており、リズムや曲想を変化させて終結部へ向かっていく。

第2楽章 Lento

東洋を感じさせる音楽となっており、日本的な情緒が横溢していて美しい音楽となっている。途中にフルートのカデンツァを挟んで静かに終結していく。

第3楽章 molto vivace

フルートが無窮動風の主題を演奏し、変拍子の主題がフルートに現れる。無窮動、変拍子の順に再現され、最後に第1楽章冒頭の主題が登場し華やかに終結する。

F.プーランク / オーボエとピアノのためのソナタ FP.185

フランシス・プーランク(1899-1963)はフランス近代の作曲家、ピアニストである。ピアノ曲、歌曲、宗教音楽、オペラなど幅広い分野において活躍を見せたプーランクは、器楽において弦楽器よりも管楽器を好んでいた。晩年に作曲された木管楽器とピアノのための3つのソナタ(フルート・ソナタ、クラリネット・ソナタ、オーボエ・ソナタ)は、楽器のテクニックを最大限に生かすと同時に、表現される深い美しさからそれぞれの楽器のレパートリーとして定着している。

《オーボエ・ソナタ》は1962年に作曲されたプーランクの遺作である。親しい友人であったロシアの作曲家、セルゲイ・プロコフィエフ(1891-1953)の思い出に捧げられた。宗教的な色彩をもち、厳粛な雰囲気包まれているこの作品は、クラリネット・ソナタのように燃え上がる生命力を感じさせる音楽ではないが、透明な明るさを感じさせる瞬間がある。

第1楽章 Elégie

「穏やかに」と指示されたオーボエ・ソロが静かな旋律を奏で始める。歌曲を思わせる伸びやかで調性感のあるメロディと、ピアノのアタックによる対比が印象的である。最後のピアノの和音とオーボエの持続音は深い孤独と寂しさを漂わせる。

第2楽章 Scherzo

自由な3部形式の楽章だが、拍子の目まぐるしい変化と複合拍子が強い緊張感をもたらしている。ピアノとオーボエの生き生きとした連打音が音楽の密度を高める。

第3楽章 Déploration (悼み)

ピアノの静かな前奏に導かれて、オーボエ・ソロが悲痛な感情をもった旋律を歌いつづける。プーランク自身が「終楽章は礼拝歌のように仕立てたい」と述べているように、友人の死を悼む哀情が感じられる。

F.プーランク / フルートとピアノのためのソナタ

1956年から1957年にかけて作曲された。アメリカの富裕な音楽愛好家、リザベス・スプラーグ・クーリッジ夫人(1864-1953)の思い出に捧げられた。1957年にジャン・ピエール・ランパル(1922-2000)と作曲者のピアノによって初演されて以来、聴衆に忘れがたい印象を与え続けている作品である。転調の戯れや洗練された旋律には、プーランクの純粋な感情が映し出しされている。

第1楽章 Allegretto malincolico

冒頭32分音符4つから始まる主題が印象的である。中間部の思い入れのあるピアノに導かれ、フルートがそれまでとは違うなだらかな旋律を歌う。落ちついた鼓動に支えられた繊細な陰影のある音楽が美しい。

第2楽章 Cantilena

アッセ・ラン(ごくゆっくりと)と記されたフルートの歌は、悲しみの情に満ちている。心に訴えかけるような旋律はピアノの和音によって支えられ、盛り上がりを見せた後静かに楽章は終わる。

第3楽章 Presto giocoso

一転して生き生きとした曲想になる。ピアノの力強い主題とともにフルート・ソロが晴れやかな旋律を歌い上げる。途中でゆったりとしたテンポを一瞬挟みつつも、活発なテンポでピアノとの掛け合いを繰り返し、輝かしく駆け抜ける。

J.イベール / フルート協奏曲

20世紀前半にフランスで活躍した作曲家、ジャック・イベール(1890-1962)。4歳からピアノを、12歳頃には作曲を学び始め、1910年、21歳のときにパリ音楽院に入学、「フランス6人組」のダリウス・ミヨー(1892-1974)やアルチュール・オネゲル(1892-1955)と同窓で、交流が盛んだった。第一次世界大戦中は海軍士官を経験し、29歳で若手作曲家の登竜門であったローマ大賞を受賞。その後、ローマへ留学した。パリ音楽院の教育委員やローマのフランス学士院院長、パリ・オペラ座総裁等、多忙な役職をこなしつつ、管弦楽、室内楽をはじめ、オペラやバレエ、映画音楽等、様々なジャンルの楽曲を手掛けた。1932年から1933年にかけて作曲され、フランスのフルーティスト、マルセル・モイーズ(1889-1984)献呈された『フルート協奏曲』は、1934年2月、モイーズのフルート、フィリップ・ゴーベール(1879-1941)の指揮で、パリ音楽院管弦楽団によって初演された。

第1楽章 Allegro ソナタ形式 へ短調。

管弦楽による短い序奏の後、独奏フルートが印象的できらびやかな第1主題を奏でる。対照的に、第2主題は穏やかなものとなっている。ティンパニの強奏で展開部へ。クライマックスでは、第1主題と第2主題が対位的に絡み合う再現部へと続き、最後は軽妙に終わる。

第2楽章 Andante 三部形式 変ニ長調。

哀調を帯びたメロディをフルートが奏でる。楽章を通して、フルートのもつ音色が際立つ音楽だが、特に再現部での独奏ヴァイオリンとのかけあいの美しさは、また違った味わいがある。

第3楽章 Allegro scherzando ロンド形式 へ長調。

管弦楽による4拍子と3拍子の序奏からはじまり、中間部では異国情緒あふれるメロディが奏でられる。リズム感とフルートの華麗な技巧は、時にジャズを感じさせたりと、表情が目まぐるしく移り変わる。

-Profile-

村松 紀親（フルート） 院 1 年

静岡県出身。11歳よりフルートを始める。洗足学園音楽大学管楽器コースを卒業。これまでにフルートを上田恭子、菅原潤、渡部亨、室内楽を辻功、山根公男、松本健司の各氏に師事。日本フルート協会主催第48回フルートデビューリサイタルに出演。現在、中学校や高等学校で音楽指導を行っている。また、幼稚園や老人ホーム、病院などで演奏活動を行っている。

吉村 由望（フルート） 院 2 年

島根県出身。9歳よりフルートを始める。島根大学教育学部音楽教育専攻を卒業。現代音楽セミナー秋吉台の夏2017において村上景子氏のマスタークラスを受講、ディプロマを取得。第54回島根県高等学校音楽コンクール木管楽器の部第1位。第37回かながわ音楽コンクールフルート部門一般の部第3位。2020年度『大学院コンチェルトの夕べ』のソリストオーディションに合格し、尾高尚忠作曲《フルート協奏曲》を洗足学園音楽大学大学院管弦楽団、現田茂夫氏と共演。これまでにフルートを山本小織、野坂知子、野津雄太、菅原潤、菅井春恵の各氏に師事。

山崎 春奈（フルート） 院 2 年

三重県出身。8歳よりフルートを始める。大友太郎、菅井春恵、高橋聖純、室木志穂の各氏に師事。第18回みえ音楽コンクールフルート部門中学生の部第1位及び岡田文化財団賞受賞。国立音楽大学演奏・創作学科弦管打楽器専修フルート専攻卒業及び管打楽器ソリスト・コース修了。故H.シュマイザー、J.フェランデイス、P.ベルノルド、S.ティリー各氏のマスタークラス、小泉浩氏の特別公開講座を受講し、研鑽を積む。フルートカルテット Chou Chou Torte メンバー。関東を中心に訪問演奏や自主企画公演等、アンサンブルでの活動も積極的に行う。第20回"万里の長城杯"国際音楽コンクールアンサンブル部門大学の最高位受賞。第28回日本クラシック音楽コンクールアンサンブル部門第5位入賞。